

丁寧化マーカー‘-yo’と n 挿入現象に見られる方言差¹

A Pilot Study of /n/-Insertion in Korean Dialects

後藤祐司

GOTO Yuji

1. 概要

拙稿の目的は、朝鮮語に現れる形態素-yo と n 挿入現象について地域方言また社会方言による違いを考察することにある。韓国で一般的に終結形叙述格助詞と呼ばれる-yo は、さまざまな語に後接しポライトネスを表す（野間秀樹 2006: 63）。この-yo は、前接する語の末子音の有無により三つの異形態、すなわち-yo と-nyo そして-iyο をもつ。その中で特に-yo に n が挿入された-nyo が観察されるため、前接する語が末子音をもっているにもかかわらず n が挿入されない叙述格助詞-ida と区別される。朝鮮語において形態素境界で起こるこのような n 挿入現象の頻度は、前接する形態素の最終音節の末子音ごとに異なるとされる（Hwang 2008: 53）。本研究では、-yo に前接する形態素の最終音節の末子音が n 挿入にどのような影響を与えるのか、ソウルを含む京畿道方言話者3名、全羅道方言話者4名そして慶尚道方言話者3名を対象とした認知実験を行った。実験結果によれば、n 挿入の選好度について形態素最終音節の末子音の影響は小さく、n 挿入を好む比率が方言ごとに異なることが明らかとなった。さらに、先行研究では言及されてこなかった男女間での違いも確認された。このような-yo に見られる n 挿入の選好度が地域方言や性別により異なるという事実は、言語変異研究の重要性を示唆する。

2. 先行研究の検討

朝鮮語において、ある形態素が/i/あるいは/y/で始まるとそれに前接する形態素との境界で n 挿入が起こる場合がある。例えば、대전역「大田駅」は대전と역二つの形態素からなっているが、대전의ㄹが連音化した/대저녁/[tɛdzʌnjʌk]ではなく、形態素境界にㄹが挿入され/대전녁/[tɛdzʌnnjʌk]と発音される。このような現象は n 挿入、あるいは n 添加現象と呼

¹ 本稿は、2012年12月にソウル大学で行われた国語学会第39回全国学術大会で発表した内容に加筆・訂正を施したものである。大会の席上でコメントいただいた方々、また個別に貴重な意見をくださった方々に感謝申し上げる。

ばれるが、連続する二つの形態素の境界で先行する形態素が子音で終り、後続形態素の頭音が/i/や/y/で始まる場合に起こる現象である。Hwang (2008)によれば、朝鮮語で n 挿入を起こす条件は次のようになる。

(1) Conditions for /n/-insertion in Korean

- a. The final syllable of M₁ is closed.
- b. The initial syllable of M₂ begins with a high front vocoid, /i/ or /j/.
- c. M₁ and M₂ form a compound/affixed form/syntactic phrase. (Hwang 2008: 1)

n 挿入を起こす条件は、本稿が扱う丁寧化マーカー-yo でも似た様相を示す。例を挙げれば、朝鮮語で「夜」を意味する 밤/bam/に丁寧化マーカー요/yo/が後接する場合、ㅇ/i/が挿入された 밤이요/bamiyo/のほかに、表記上 밤요が現れうる。このように表記された 밤요は再音節を起こした/bamyo/だけでなく、n が挿入された/bamnyo/も現れうるのだが、これは 밤と요二つの形態素からなっているためである。つまり、(1)で見た n 挿入の条件と合致する環境であれば形態素の境界に n が添加されうるということがわかる。また、丁寧化マーカー-yo は前接する形態素の最終音節末子音の違いによって先に言及した-nyo のほかに二つの異形態が現れうる。すなわち、再音節化と i 挿入である。再音節化とは、末子音をもつ音節に母音や半母音で始まる音節が後続する際先行する音節の末子音が後続音節の頭子音として発音される現象であり、また i 挿入とは、最終音節が子音で終る形態素に丁寧化マーカー-yo が後接する際それらの境界に/i/が挿入される現象を指す。下の(2)は、このような-yo に見られる異形態をまとめたものである。

(2) -yo に現れる三つの異形態の例

	<i>bam-yo</i>
再音節化	ba.myo
n 挿入	bam.nyō
i 挿入	ba.mi.yo

朝鮮語の n 挿入に関し、これまで Hwang(2008)をはじめ多くの研究がなされてきたものの、丁寧化マーカー-yo と n 挿入との関係を扱った研究は十分に行われているとはいえない (Hong 2005; Lee & Lee 2006; 엄태수 2010; 오미라 2006; 野間 2006)。地域方言ある

いは性別といった社会方言ごとに n 挿入がどのような様相を示すのか、その中でも本稿が扱う丁寧化マーカー-yo と n 挿入との関係を明らかにした論考はごく限られたものしかない。その一つ Hong(2005)によれば、丁寧化マーカー-yo に対する n 挿入が慶尚道方言では次のように現れるとされる。

- (3) a. New York-i-yo nyuyon-nyo ‘New York-be-Q’
 *nyuyok-iyo(SNK)
- b. cheksaŋ-i-yo cheksaŋ-nyo ‘desk-be-Q’
 *cheksaŋ-iyo(SNK) (Hong 2005: 71)

(3)が示唆するところは、慶尚道方言が丁寧化マーカー-yo で n 挿入を選好するのではないかということである。以下で、-yo と n 挿入との間にどのような相関を見せるのか調査するため、ソウルを含む京畿道方言話者3名、慶尚道方言話者3名そして全羅道方言話者4名を対象に認知実験を行った。

3. 実験方法

Praat スクリプト(Experiment MFC)²を利用し作成した認知実験を行った。これは自然度評価実験であり、被験者は刺激音を聞き自然度を評価し点数を付けた。被験者は各10回ずつ無作為の順序で聞こえてくる刺激音に対し、自然度が最も低いものを1、最も高いものを7の7段階に評価した。刺激音は京畿道方言話者の声を録音したものを使用した。被験者のデータを(4)に、実験で使用した刺激音を(5)に、被験者に提示された実験画面を(6)にそれぞれ示す。

(4) 被験者のデータ

被験者	性別	言語形成期を過ぎた所
HHS	女	慶尚北道 浦項市
CSH	女	慶尚南道 昌原市
JSC	男	釜山広域市
KCR	女	光州広域市

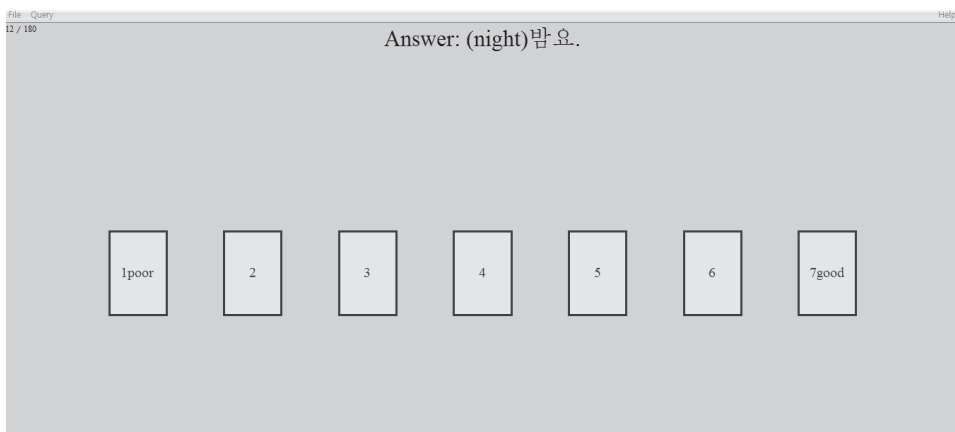
² Praat を利用した音声認知実験の作成方法については北原他(2008)が詳しい。

KMG	女	全羅南道 木浦市
SCH	男	全羅南道 木浦市
JSW	女	光州広域市
YJA	女	ソウル特別市
KSH	女	京畿道 安養市
KMH	男	ソウル特別市

(5) 実験で使用した刺激音³

밥(rice)		밤(night)		방(room)	
밥이요	ba.bi.yo	밤이요	ba.mi.yo	방이요	baN.i.yo
밥요	ba.byo	밤요	ba.myo	방요	baN.yo
	bam.nyo		bam.nyo		baN.nyo
박(gourd)		반(group)		발(foot)	
박이요	ba.gi.yo	반이요	ba.ni.yo	발이요	ba.li.yo
박요	ba.gyo	반요	ba.nyo	발요	ba.lyo
	baN.nyo		ban.nyo		bal.lyo

(6) 実験画面



³ (5)で末子音が/d/の語が除かれているが、これは Jun(2010)で指摘されているように/d/が再音節化すると/d/のほかに/s/や/ɾ/など様々な音価で現れることが考えられ、実験が複雑になるのを防ぐためである。

被験者がつけた点数の平均値は、SPSS(Statistical Package for the Social Sciences)を使用し以下統計処理を行った。

4. 実験結果

図1、図2そして図3はそれぞれ丁寧化マーカー-yo に前接する形態素の末子音ごとの i 挿入、n 挿入そして再音節化に対する自然度評価実験の結果である。

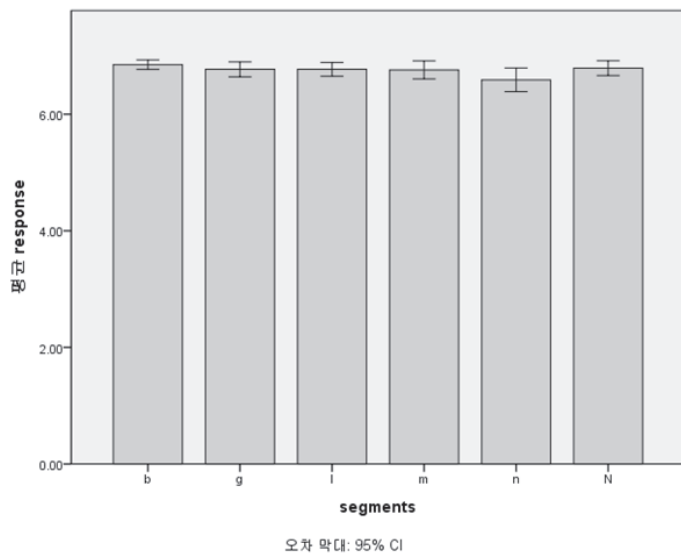


図1 i 挿入に対する自然度評価の結果 (信頼区間は95%)

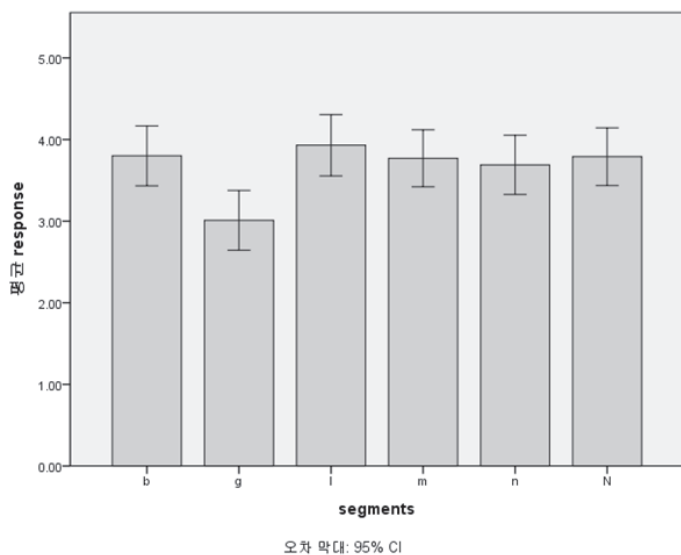


図2 n 挿入に対する自然度評価の結果（信頼区間は95%）

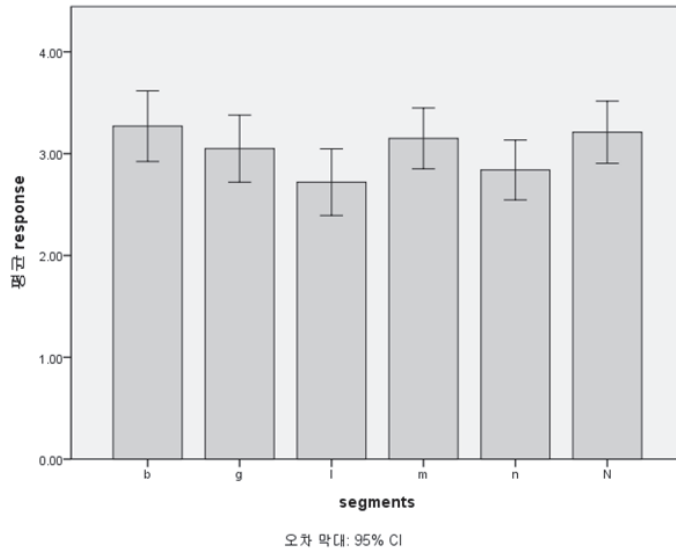


図3 再音節化に対する自然度評価の結果（信頼区間は95%）

まず図1を見ると、i 挿入の場合-yo に先行する子音に関係なく /b/、/g/、/l/、/m/、/n/、/N/ すべての子音で7に近い点数を得た。また、図2と図3も含め-yo に先行する子音が i 挿入、n 挿入そして再音節化それぞれの自然度評価に大きな影響を与えないことがわかる⁴。さらに、これらの結果は丁寧化マーカー-yo に現れる異形態、その中でも特に n 挿入と再音節化に対する選好度が語末子音以外の影響を受ける可能性を示唆する。

Hong(2005)によれば、慶尚道方言では丁寧化マーカー-yo が後接する場合、それに前接する形態素との間で n 挿入を選好するとされるが、n 挿入と再音節化間で自然度評価が京畿道方言、慶尚道方言、全羅道方言それぞれの方言ごとに違いを見せるのか、次に分散分析を行った。

⁴ 図2の n 挿入の場合、詳細に見ると막요/baNnyo/と발요/ballyo/の間に有意差が観察されるが、この点について被験者から막(gourd)という語を使うことが少ないとの指摘を受けた。

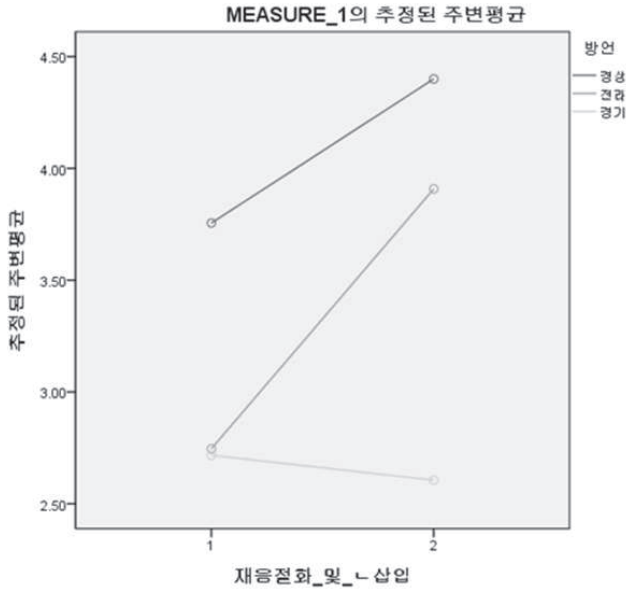


图4 再音節化[1]と n 挿入[2]に対する自然度評価の地域方言差

地域方言と再音節化・n 挿入間の自然度平均値に有意差が見られるのか検討するために、それらを2要因とした二元配置分散分析を行った。前者の要因は被験者間要因で、後者の要因は被験者内要因である。分析結果を確認すると、地域方言間要因に有意な主効果が見られ ($F(2, 597) = 48.088, MSe = 3.762, p < .01$)、再音節化・n 挿入要因にも有意な主効果が観察され ($F(1, 597) = 63.003, MSe = 1.494, p < .01$)、さらに再音節化・n 挿入*地域方言要因でも有意な主効果が現れた ($F(2, 597) = 27.937, MSe = 1.494, p < .01$)。以上をもとに単純主効果の検定を実施した結果 (Bonferroni の方法)、a)慶尚道、全羅道方言において5%の水準で有意差が見られ、それぞれの平均値は n 挿入[2] > 再音節化[1]であった。そして、b)再音節化において5%の水準で有意差が現れ、慶尚 > 全羅、慶尚 > 京畿であり、また n 挿入[2]では同水準で慶尚 > 全羅 > 京畿の順であった。この結果は、丁寧化マーカー-yo に対する n 挿入の選好度が地域方言ごとに異なることを意味する。

さらに、先行研究では言及されていない丁寧化マーカー-yo と n 挿入・再音節化の選好度が性別の違いでどのような様相を示すのか調べた。

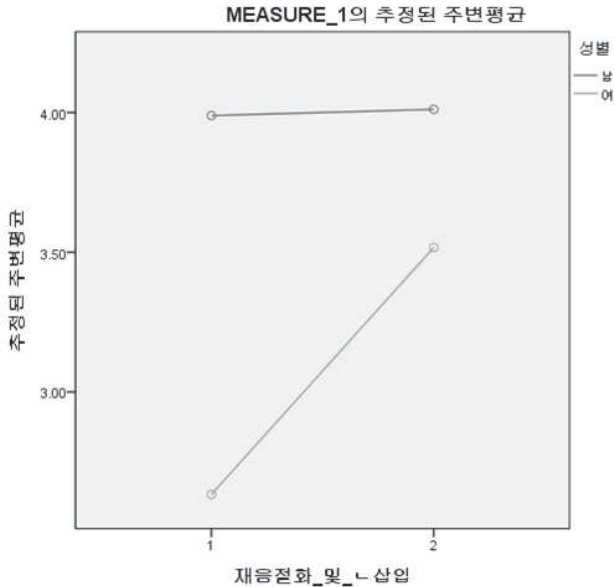


図5 再音節化[1]と n 挿入[2]に対する自然度評価の男女差

性別と再音節化・n 挿入間の自然度評価の平均値に有意差が見られるのか検討するために、それらを2要因とする二元配置分散分析を行った。前者の要因は被験者間要因で、後者の要因は被験者内要因である。分析結果を確認すると、性別と再音節化・n 挿入の両要因どちらも有意な主効果が現れ (性別: $F(1, 598) = 53.909, MSe = 4.000, p < .01$; 再音節化・n 挿入: $F(1, 598) = 33.269, MSe = 1.553, p < .01$)、交互作用も有意であった ($F(1, 598) = 30.084, MSe = 1.553, p < .01$)。以上をもとに単純主効果の検定を実施した結果(Bonferroniの方法)、a)女性話者において5%の水準で有意差が現れ、n 挿入[2] > 再音節化[1]であった。また、b)再音節化と n 挿入どちらも5%の水準で有意差が見られ、男性 > 女性であった。この結果は、丁寧化マーカー-yo に関して再音節化と n 挿入の自然度を比較すると、男性話者は両者とも似たように知覚する一方、女性話者は再音節化より n 挿入を選好することを意味する。

5. 結論

ここまで、朝鮮語でポライトネスを表す形態素-yo と n 挿入間に現れる方言ごとの特徴について考察してきたが、次のように結論づけられる。a)慶尚道方言は他の二つの方言、すなわち全羅道方言と京畿道方言より n 挿入を選好し、一方で京畿道方言は n 挿入を嫌う傾向があることが明らかになった。そして、b)性別による再音節化また n 挿入の選好度を

調査した結果、女性話者の場合前者より後者を選好することが確認された。このような丁寧化マーカ-*-yo* と *n* 挿入に見られる方言間バリエーションの一般化のためには、本稿で扱えなかった他地域の方言、また話者の年齢ごとに違いが現れるのか等、今後さらなる調査が必要だと考える⁵。最後に、実験に快く協力いただいた朝鮮語話者の方々にこの場を借りて感謝したい。

参考文献

- Davis, S. and S. H. Shin.(1999), The syllable contact constraint in Korean: An optimality-theoretic analysis, *Journal of East Asian Linguistics* 8, 285-312.
- Hong, S. H.(2005), [n]-Insertion in the Kyungsang Dialect, *새한영어영문학회 학술발표회 논문집* 2005-5, 69-79.
- Hwang, S. J.(2008), Korean speakers' knowledge of /n/-insertion: P-map approach, master's thesis (Seoul National University).
- Jun, J. H.(2010), Stem-final obstruent variation in Korean, *Journal of East Asian linguistics* 19-2, 137-179.
- Lee, Y. S. and M. K. Lee.(2006), n-Insertion as y-Devocalization in Korean, *언어* 31-3, 413-440.
- 엄태수(2010), ㄴ 첨가에 대한 표준어 규정의 연구, *국제어문* 50, 7-28.
- 오미라(2006), ㄴ-삽입 환경의 재검토, *언어학* 14-3, 117-135.
- 北原真冬, 田嶋圭一(2008), Praat で音声を可視化する<6>音声知覚の実験, *言語* 37-12, 102-107.
- 野間秀樹(2006), 現代朝鮮語の丁寧化マーカ-"*-yo/-iyo*"について, *朝鮮學報* 199/200, 37-81.

(ソウル大学校言語学科博士課程)

⁵ Davis & Shin(1999)では最適性理論の観点から、Syllable Contact という制約が朝鮮語の再音節化に現れるバリエーションにかかわると見ており意義深い。